

# びわこの 考湖学

23

前回は、織田信長が大変大きな船を琵琶湖で使ったものの、すぐに小さな船に作り替えた話をしました。では、今回はなぜ大船は解体され、その後の舟運に生かされなかったかを考えてみることにします。

まず、海とは違う琵琶湖特有の自然条件を考えてみます。琵琶湖の水深は北湖が深く南湖が極端に浅くなっています。さらに、港が置かれていた内湖や沿岸部も水深は浅いうえに、四季を通じて水位の変動が激しいのです。また、海水に比べると淡水は、船の浮力を得にくい特徴があります。

次に、大船の構造を見てみましょう。戦国時代の海において大型の軍船として使用されたのは安宅船と呼ばれる船

です。安宅船は、板材を縫い釘と鋸によって繋いで建造した船体の上に、ほぼ同じ面積の箱形の構造物(矢倉)が据え付けられた船です。小さなものでも500石積級、通常1000石以上2000石積級であったといわれており、信長が作らせた大船もおそらくは大型の安宅船ではなかったかと思われま

す。琵琶湖博物館の用田政晴さんの聞き取り調査によると、荷を積んだ100石積の丸子船が入れる港は、かつての堅田港でも2力所しかなかったと言いますが、これは先に述べたように水深が大きく関係しています。

このことから琵琶湖では、信長の大型の船のような1000石積級の船が自由に航行するのは、そもそも無理があった

## 信長の巨大船 下



現在の堅田漁港。中世から南湖屈指の「湊」だったが、信長の巨大船が入港できるスペースはなかった

といえます。つまり、琵琶湖では喫水が深い大きな船は、実用的な使用ができなかったのです。

そして信長の失敗以降、琵琶湖では、多量の荷を積める大型船は建造されず、その自然条件に適した船が発達する

こととなったのです。さて、信長はこのあとどうしたのでしょ

う。天正4(1576)年の石山本願寺攻めにおける大阪湾木津川河口の海戦では、織田水軍は本願寺を援助する強力な毛利水軍に完膚無きまでにたたきのめされますが、天正6年の2回目の木津川河口の海戦では、織田水軍が圧倒的勝利を収めます。

強力な毛利水軍を打ち破ったのは、鉄甲船とよばれる鉄板で外装を覆った非常に大きな安宅船でした。鉄甲船を建造する際には、琵琶湖での大船建造の技術と経験が大いに役に立ったのではないかと考えられます。

転んでもただでは起きない。さすがは信長といったところでしょうか。

(滋賀県文化財保護協会 岩橋隆浩)

## すぐ解体も… 建造技術は継承